

章立て

はじめに

## 第1章 生命保険と死生観

## 第1節 明治・大正時代

## 第2節 昭和・平成時代

## 第2章 生命保険と現代社会

## 第1節 現代の生命保険にみる社会の特徴

## 第2節 現代（Before コロナ）の死生観

おわりに

## はじめに

現代の日本は「生命保険大国」と呼ばれており、世界市場に占めるシェア率を見ても 11.85%<sup>1)</sup>とアメリカの 21.04%<sup>2)</sup>に次いで 2 位である。近代的な生命保険は 17 世紀にイギリスで生まれ、その後アメリカに渡り、渡米した福澤が日本に伝えたことで、日本の生命保険の歴史は始まった。1867 年、福澤諭吉が『西洋旅案内』という当時のベストセラー著書で近代的な保険の概念を紹介したのを発端に、日本で近代的な保険の仕組みが広く認知されるようになった。当時、保険という訳語はなく、「災難請合」や「イシュアランス」という訳語で以下のように紹介されていた。

災難請合とは商人の組合ありて平生無事の時に人より割合の金を取りて万一其の人へ災難あれば組合より大金を出して其の損亡を救ふ仕法なり。其の大趣意は一人の災難を大勢に分ち僅の金を棄て大難を遁るゝ訳……（福澤諭吉, 1867:34）

上記を現代の言葉に直すと、「リスクが潜在化している時に生命保険料を一定額支払い、もし事故などのリスクに直面した場合に、損害や死亡に対して保険金や給付金が生命保険会社から支払われるという仕組みである。その趣旨は 1 人が直面したリスクをその他の加入者で分散し、契約した際の保険料で大きなリスクを避けるということ」だ。1867 年に概念が伝えられてから、日本での保険の基本的な仕組みは現代に至るまで変わっていないことがわかる。福澤（1867）は、「人の生涯を請合」、「家宅諸道具商売品田畑山林等を請合」、「渡海中船の災難を請合」の 3 種類の「災難請合」を紹介しており、現代の生命保険と損害保険の両方の概念を日本に伝えていた。その内、生命保険にあたるのが「人の生涯を請合」で、以下のように紹介している。

第一人の生涯を請合ふ事此法は甚だ入組たることなり素人同士組合を結て若し組合の内に病氣其外災難に逢ふ者あれば組合一統より金を出し合せてこれを救ひ又は死後に其妻子を扶助することあり又或は商人に元金を以て組合を立人の生涯達者の内に年々何程かの金を取て若し其人病氣を煩ひ渡世の

出来ざるよふになれば死ぬまでの手当を年々組合より払戻し又は約束次第にて死後の妻子を養ふこともあり又或は商人に組合ありて此組合へ年々積金を納れば十年か二十年の限にて毎年積金の高を減じ年限を終れば金を出さずして其組合に入り其後は却て仲間の割合を取て其身の老後死後の暮向を立る法……（福澤諭吉, 1867:35）

上記の内容を要約して訳すと、「生命保険は病気になった場合に契約金の払い戻しや、加入者が死亡した場合に妻子の生活費を扶助するという仕組みであり、支払い期間が終了すればお金を払わずとも老後や死後の生活の安定を図ることができる」ということだ。これは、現代の終身保険や就業不能保険にあたりと考える。

このように、現代の生命保険と同様の概念が2度目のアメリカの渡航を経た福澤によって1867年に伝えられて以降、紆余曲折を経て日本は生命保険大国となった。第1章では、その過程を日本人の死生観と共に考察する。そして、第2章では現代の生命保険の特徴から現代の死生観や社会について考察していく。

## 第1章 生命保険と死生観

本章では、生命保険が受容される過程と死生観について考察する。第1節では明治・大正時代、第2節では昭和・平成時代に分けて考察する。受容される過程について緻密に追ったものではなく、言及する必要があるもののみにとどめている。

### 第1節 明治・大正時代

福澤が生命保険の概念を日本に伝えてから14年後の1881年に福澤の門下生らによって、日本で初めての生命保険会社「有限明治生命保険会社」が設立された。生命保険会社が設立されるまでに14年の歳月がかかったのは、明治維新後10年間は様々な制度の近代化が推し進められており、1880年頃まで日本経済の基盤が不安定だったためだ。このような激動の時代に設立された明治生命は、開業後1か月で加入者が291名、保険金額20万4700円<sup>3)</sup>と順調であったようだ。開業するまで、福澤を含め門下生ら生命保険の必要性について啓蒙活動を続けたことによる成果であったといえるだろう。（田村祐一郎, 2008）によれば、創業前からの「生命保険は金で換える『延命法』」というイメージが創業後もしばらく続いていたようだ。明治生命の創業者である阿部泰三が「ご馳走政策」の一環として岡山で重鎮を招いて生命保険の説明をした時に言ったとされる言葉を引用する。

困る事には、生命保険に這入ったら寿命が縮むとか又は生命保険を指して長寿を保証する保険だとか、又は私等を見て寿命の鑑定をする人だといふので時々遣って来て、先生私は此末何歳まで生きますかといふような質問をする人もありて、夫を一々説得するには困ったものです。

このように生命保険に対して「延命法」だと誤解している人がいたのは、まだ義務教育制度が整っていなかった世代が大多数を占めていたことも原因の1つであると考えられる。その点、阿部らは高等教育を受けてきたであろう重鎮や有力者を中心に生命保険の必要性を訴えていたのではないだろうか。明治生命創業から3、4年後（1884年から1885年の間）の職業別の契約者数を図1でみても、官吏（現在

の公務員にあたる)、銀行会社員、商人で契約者総数の7割を占めている。このように、官吏、銀行会社員、商人といった職業の人が契約していたのは、福澤門下生らの人脈や「ご馳走政策」の賜物だと考える。ご馳走政策とは、「創立期の生命保険会社の社員が地方に出張し、当地の有力者を集め、酒食を供しながら募集」することだ。このような戦略で、創業1か月で契約数が291名、創業から4年で2299名<sup>4)</sup>まで契約数を伸ばすことができたのだろう。

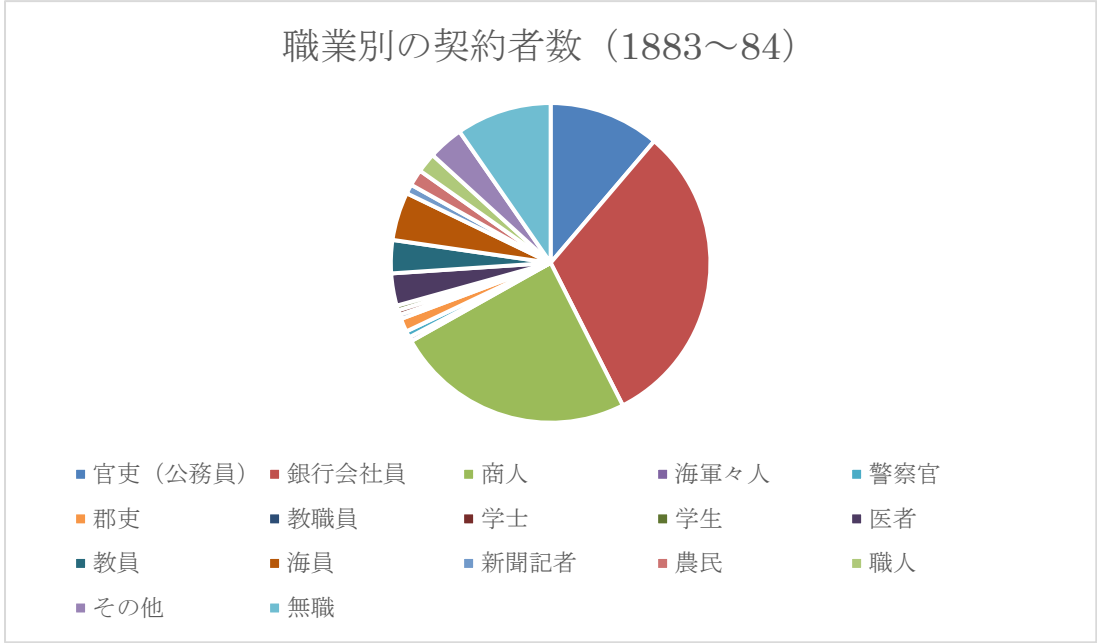


図1 職業別の契約者数  
 「出典：生命保険協会（2018）をもとに作成」

明治時代や大正時代の生命保険の販売種類は、終身保険や養老保険がメインであった。この当時の終身保険は、死亡した場合に保険金が支払われるものだ。また、養老保険は貯蓄を目的に入る人が多い保険で期限が来れば生存の有無に関係なく保険金が支払われるものである。明治前期は、図2のように終身保険の加入率が高かった。これは、創業当初の販売方法として、会社などに団体生命保険の加入促進を図っていたためであると考えられる。明治後期になると、養老保険の方が終身保険の加入率より高い状態になっていることが図2からわかる。この要因として考えられる点は4つある。

1つ目は、人の死に関わることをビジネスにすることに対して理解されなかったことが原因だと考える。この頃になると、生命保険の仕組みが徐々に人々に周知され始め、「延命法」

お金のために契約するものだと認識されていたようだ。生命保険の仕組みが周知され始めると、人の死が因習縁起である種タブー視する風潮があった当時は、死を意識する終身保険よりも養老保険の方が理

	終身保険		養老保険
明治14年 (1881年)	618件 (97%)	>	22件 (3%)
明治20年 (1887年)	1,009件 (96%)	>	47件 (4%)
明治25年 (1892年)	7,767件 (78%)	>	2,252件 (22%)
明治30年 (1897年)	4.3万件 (44%)	<	5.4万件 (56%)
明治35年 (1902年)	4.2万件 (47%)	<	4.8万件 (53%)
明治40年 (1907年)	4.3万件 (24%)	<	13.7万件 (76%)
明治44年 (1911年)	4.8万件 (17%)	<	23.2万件 (83%)

図2 明治期の終身保険・養老保険の加入率  
 「出典：生命保険協会（2018）」

解されやすかったのだと考える。この時代は医療が未発達であったことから、平均寿命も男性が42.8歳、女性が44.3歳<sup>5)</sup>と現代の半分である。いつ死ぬのかわからない状況で、死を意識することを忌避する人の方が多かったと考える。2つ目の要因は、職住一体だ。明治時代は近代化が促進されたが、家業を継ぐ人の方が大半だった。そのため、家独自の慣習等があったため近代的な生活保障としての終身保険は好まれなかったと考える。

3つ目の要因は、貯蓄思想が普及したことが挙げられる。1875年に郵便貯蓄サービスが始まったが、その当時は貯蓄思想が根付いていなかったそうだと(総務省, 2010)。しかし、日本初の生命保険会社が設立された1881年に貯蓄奨励が行われたことなどを通して、貯蓄思想が次第に根付いていったといえる。そのような貯蓄思想の普及と共に、貯蓄としての機能がある養老保険の方が好まれたと言えるだろう。当時の貯蓄についての考えが夏目漱石の『吾輩は猫である』で窺い知ることができる。少し長くなるが引用する。

こないだ保険会社の人が来て、ぜひおはいんなさいって勧めているでしょう、——いろいろわけを言って、こういう利益があるのって、なんでも一時間も話をしたんですが、どうしてもはいらないの。うちだって貯蓄はなし、こうして小供は三人もあるし、せめて保険へでもはいってくれとよっぽど心丈夫なんですけれども、そんなことは少しもかまわないんですもの……

これは、主人公の猫「吾輩」の飼い主である「珍野苦沙弥」の奥さん「珍野夫人」が、姪の「雪江」に、「珍野苦沙弥」と生命保険会社の男とのやり取りの様子を伝えているシーンだ。貯蓄がないことを心配している様子から、貯蓄が重視される時代となっていることがわかる。また、生命保険が貯蓄の手段として考えられているともいえるだろう。そして、貯蓄がないのに保険に入る様子もない主人に対して不安を感じている様子から、保険は一家の大黒柱が入るものであるという考えもあったと考える。これは、明治時代の家父長制の影響を受けたものといえるだろう。

このような貯蓄思想は、大正時代になっても続く。特に大正時代は「養老保険万歳期」(田村, 2008)と呼ばれ、貯蓄思想が定着した時代といえるだろう。また、大正時代は1918年に流行した「スペイン風邪」や1923年の「関東大震災」によって、生命保険の重要性が認識された。明治・大正時代は賠償金を多く得た戦争もあり、日本経済が発展したと共に、生命保険会社も急成長した。その上、人々の生命保険の重要性の認知も急速に広まったことで、契約数も増えた。しかし、それでも死を意識することは忌避されていた。例として、川端康成の『生命保険』を引用する。

私は非常な名案らしく生命保険と云うものが頭に浮かんで来た。しかしまだ若い学生の身空で本気でこんなことを思う自分が情けなくなった。(川端, 1924)

これは生まれつき虚弱体質の学生である主人公が、早死にするであろうことを隠して家出少女との結婚を申し込んでしまい、罪悪感を抱いているときに酔った医者と散歩するシーンの会話で「生命保険」を勧められた際の気持ちである。このことから、生命保険は一般的に普及しているが、若いうちから死を意識して「生命保険」に加入する人はあまりいなかったことがわかる。また、主人公が「生命保険」について真剣に考えている自分自身に対して情けなく思っている様子から、大正時代の人も死を忌避す

べきものと捉えていたのだと推察する。

以上のように、明治時代・大正時代の生命保険の動向から当時の社会状況や死生観について考察した。明治時代や大正時代では、終身保険よりも養老保険の方が好まれており、死に対して否定的に捉える傾向があることがわかった。次の節では昭和時代・平成時代について考察する。

## 第2節 昭和・平成時代

昭和に突入すると、政府からの要請で生命保険会社も戦争への協力が求められた。例えば、太平洋戦争時に設立された「戦時金融機関」への融資等だ。これは太平洋戦争開始後に、「各社は戦時下生保事業の使命の愈々重大なのに鑑み協力一致政府の施策に即応して職域奉公に邁進する」ことを申し合わせたためだ（駒崎・中沢, 1958）。戦争で敗戦路線とたどると、戦死者数が増加によって保険金の支払いも急増した。そのため、民間保険会社の支払い能力では保険金の支払いが困難な状況となり、国家が直接介入する事態となった。戦争が終わった後も生命保険業界全体で経済的に大打撃を受けており、国家による再建が進められた。昭和前期は戦争に行き、お国のために死ぬことが国民の義務とされていた。そのため、国のために死ぬことは尊いものであるという価値観を国民は強要されていたと考えられるが、口に出すことや文章にして残すことは非国民として扱われるため、当時の人々実際にどのような死生観を持っていたのかという点はわからなかった。しかし、戦前に再三「お国のために死ぬこと」など、死ぬことを国から命令されていたことを反省し、戦後からしばらくは死をタブー視する風潮があったと考える。そのため、戦後から1950年代までは、貯蓄の要素が強い養老保険が主流だった。

1960年代からは養老保険に変わって終身保険が2000代までの主流となった。これはGHQによる間接統治によって家制度が崩されたことで、家族形態や就業形態の変化がもたらしたことから、社会的な生活保障として終身保険が求められるようになったことも1つの要因だと考える。また、平均寿命も67歳以上<sup>7)</sup>に伸びてきたことも要因だといえるだろう。

戦後の死をタブー視する傾向から、死を社会的に意識するようになったのは、1973年に訪れた「終末ブーム」（クレタ, 2017）からだろう。きっかけとなったのは小松左京の『日本沈没』や、五島勉の『ノスタルダムスの大予言』であった。これらの本やメディアが煽ったことで、「1999年までしか生きられない」と日本全土に恐怖で包まれた。実際には根拠のないものだったが、死ぬまでに何をするかということを考えるきっかけとなったのではないだろうか。また、1970年代から終身保険の加入率が90%を超えたといわれているのも、1973年からの「終末ブーム」の影響が大きかったためだと推察する。戦後、日本経済が回復していく中、人々の間で余裕が生まれ始め、死に向き合う土台ができたといえる。

そして、1986年から1991年までのバブル景気によって人々の生活は一変した。バブル期になると再び養老保険が再び人気を博したが一時的なものだった。この時代の金融商品の利率が高く、生命保険も例外ではなかったためだ。この時代は日本経済がとても安定しており、人々の心にもゆとりが生まれた。そのため、死について考える人は少なく、むしろ死を超越する人間という傾向が、バブル期にヒットした漫画の『ドラゴンボール』から読み取れるのではないかと考える。

バブル期が終了すると、「失われた10年」といわれる不景気に入った。このような状況の中、生命保険は再び終身保険が主流となった。1990年代は医療の発展によって尊厳死の問題など、人々の死生観に関わる内容が社会問題化した。また、医療が発展したことで医療保険も普及するようになった。このような様々な出来事から、人々の生き方は多様化し始めた。そして、バブル期で忘れられていた「終末ブ

ーム」が再来したことで、人々は再び死を意識するようになった。これは、『ノスタルダムスの大予言』が外れて地球が滅亡しなくても続いた。

例えば、2004年頃から話題になり始めた「エンディングノート」が挙げられる。「エンディングノート」とは、「これまでの人生を振り返って整理することで、残された人生でどのようなことをすべきか」といったことを考える手段として使われるものである（エンディングノート普及センター, 2011）。こうした新たな「終末ブーム」によって、人々は肯定的に死について考える傾向がみられるようになった。このような傾向がみられるようになったのは、医療がさらに発展し、昭和時代まで死因で多かった結核などの感染症を抑え込むことができたことで、余命がわかる病気が多くなったためだろう。人々が死を肯定的に捉えるようになったことで、生命保険に入るのが一般化してきているのだ。

## 第2章 生命保険と現代社会

前章では、生命保険の歴史や死生観の変容について述べた。本章では、現代に焦点を当てて生命保険と社会について考察をしていく。第1節で生命保険のCMから現代の生命保険の特徴や、その特徴の背景にある社会の動向について考察する。そして、第2節では現代の人々がどのような死生観を持っているのかについて考察する。

### 第1節 現代の生命保険にみる社会の特徴

テレビを見ていると生命保険のCMをよくみかける。他の業界のCMと比べて真面目な雰囲気や、他の業界のCMと比べて真面目な雰囲気のCMが多いのは、生命保険が人の生死に関わる商品を扱っているためだろう。2018年から放映されている日本生命の「見守るといふこと。」を例に挙げる。このCMは、お父さんの視点で高校生になった娘を見守るというストーリーが展開されている。見守っているお父さんは、娘の大学受験を前に入院し亡くなるが、受験を終えた娘がお墓の前で、「お父さん。大学に行けるよ。ありがとね。」と手を合わせている様子が映し出され、図3のように「大切なものを守り抜く」というテロップで終わる。世帯主が亡くなっても、残された家族が路頭に迷わないように守ることができ保険だということを訴えかけているCMだと感じた。このように人の一生を支えるというブランド戦略を展開する生命保険会社のCMをよくみかける。



図3 日本生命 CM

出典：「日本生命 HP (2018) よりスクリーンショット」

しかし、最近では真面目な雰囲気や感動的なCMから打って変わって陽気な雰囲気のCMもみられるようになった。その例の1つとして、2020年8月19日から全国放映され始めた住友生命の「Vitality」のCM(図4)を取り上げたい。このCMは、キャストにお笑い芸人のバナナマンを採用し、ムード的な音楽とお笑い要素を兼ね備えた良い意味で生命保険らしからぬCMである。これは住友生命の「Vitality」という健康増進型保険が、新しい保険であるためだろう。このCM



図4 住友生命 CM

出典：「住友生命 HP (2020) よりスクリーンショット」

は日本生命の CM とは異なり、商品の内容を紹介することに特化した CM だ。最近様々な保険会社で健康増進型保険販売され始めているが、住友生命の CM で特徴的なのは、ホモエコノミカス（合理的経済人）という言葉が第 1 のキーワードとして健康増進型保険のメリットを紹介している点だ。ホモエコノミカス（合理的経済人）とは、一般的には「自己の経済利益を極大化させることを唯一の行動基準として行動する人間」のことで、この CM では「保険料を安くする」などお得に弱い人間（ヒューマン）のことを指している。

表 1 日本生命と住友生命の CM 比較

比較項目	日本生命	住友生命
CM の展開方式	ストーリー型	商品解説型
生命保険の内容	終身保険	健康増進型保険
雰囲気	真面目、感動的	陽気、リズミカル
主演	清原果耶（女優）	バナナマン（お笑い芸人）
特徴	<ul style="list-style-type: none"> <li>・言葉で伝えるのではなく、映像で視聴者に想像力を働かせる</li> <li>・<b>リスクに備える</b></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・キーワードで伝える</li> <li>ホモエコノミカス（合理的経済人）／行動経済学／保険料 15% 減／ポイント制／特典／ご褒美</li> <li>・<b>リスクを防ぐ</b></li> </ul>

出典：（日本生命 HP,2018）と（住友生命 HP,2020）をもとに筆者作成

この 2 つの CM の特徴をまとめると表 1 のようになる。特に注目したい点は、生命保険の内容である。日本生命は、CM 内で「保険」という単語が 1 度も出てこない。唯一出てくるのは、過去の振り返りシーンで生命保険の契約書に印鑑を押している様子のみだ。CM 内で「保険」という単語が出てこなくても、お父さんが亡くなることで終身保険の CM であることがわかる。この CM が最も伝えたいことは「人はいつか死ぬ。だから家族のために備えよう」というメッセージだと考える。一方、住友生命は CM 内で健康増進型保険の魅力をお笑い芸人が伝えるというコンセプトから、人の死を感じさせない CM となっている。この CM が最も伝えたいことは「人の寿命は長い。だから健康でいられる時間を増やそう」というメッセージだと考える。また、その手段として「合理的」で「楽しくなる保険」を使ってみませんかということをお願いのだろう。この 2 つを合わせて考えると、保険の役割が変容してきていることがわかる。従来の生命保険は終身保険が中心であり、「リスクに備える」という役割があった。しかし、現代において登場し主流となりつつある健康増進型保険は、「リスクを防ぐ」という役割を担おうとしている。この動きの背景には、20 歳以上の生命保険の加入率が 82.1% と高く、従来の保険では新規加入を多く見込めない生命保険会社の事情も考えられるが、現代の平均寿命と健康寿命の差が男性で 8.73 歳、女性で 12.07 歳と非常に大きな差があるという社会的な問題があるためだと考える。

また、住友生命の CM では「合理的経済人」という言葉が出てくる点が特徴的である。現代において保険は「合理的なリスク処理手段」（堀田,2016）とも呼ばれるようになり、生命保険は死んだときに残された家族が路頭に迷うリスクや働けなくなった時に生計を立てられないリスクを合理的にお金で処理する手段と認識されるようになった。しかし、住友生命の CM では保険そのものが合理的というよりも、

保険の加入者が合理的であることが重要になっていると感じる。このことから、近代から促進されてきた社会の合理化が、現代において社会を構成している人間にも進出してきているといえるのではないだろうか。

## 第2節 現代 (Before コロナ) の死生観

2019年に「老後2000万円問題」が話題になった。公的年金の受給に加えて、老後に2000万円貯蓄がないと安定的な生活できないだろうという金融庁の報告書をきっかけに、人々は老後の蓄えを気にし始めた。死ぬまでにいくらあれば生きていけるだろうという疑問は、明治時代から昭和時代までは恐らく考えられてこなかったと思われる。こうした疑問は現代特有のものであり、死生観と結びつくものだ。現代において、このような問題が浮上したのは、少子高齢化によって年金の需要と供給が釣り合わなくなっていくことが想定されているからだと考える。また、第1章第2節で述べたエンディングノートの普及と共に、老後の資金繰りも考えるようになったことも一因だろう。

現代において死を見据えてどのように生きるのかということを考える人は増えてきていると考える。エンディングノートは中高年を中心に普及したものだが、エンディングノート以外も就活生が行うことを推奨されている自己分析でも将来や人生について考える機会がある。生き方が多様化し、長寿化している現代だからこそ、死ぬまでにやりたいことを考えて実行するということが現代の生き方なのだ。

しかし、私は残りの人生の生き方を事前に決めてそれ通りに生きるということは合理性を追求しすぎているのではないだろうかと考える。確かに、今までの人生を整理してやりたいことを発見するという作業は、自身で気づいていなかったことが実はやりたいことだったという発見もあるかもしれない。だが、それだけに囚われすぎると、合理的に計画を実行することのみを考え始め、残りの人生が豊かなものとはならないだろう。

合理的に生きることを否定しているわけではないが、現代社会において合理性を追求するあまり、生き方の面でも合理化が進んできているのではないだろうか。前項で生命保険の変容と共に、加入者が合理的に行動することを望むような風潮がみられるようになったと述べた。これも、生命保険が合理的手段としての役割を果たせば果たすほど、合理化が人間の精神面にも侵食してきている1例ではないだろうか。

## おわりに

新型コロナウイルスが世界中に蔓延し始めてから約1年が経とうとしている。東京オリンピックが延期となり、緊急事態宣言が出されて巣ごもりが行われるなど、前代未聞の事態に陥った。ウイルスに効くワクチンの開発や実用化が急がれる中、感染者数の増加が報道され続け、世界は新型コロナウイルスの脅威に震えていた。新型コロナウイルス時代が台頭した現在、人々の死生観はこれまでとは異なる様相を呈していると考えられる。

新型コロナウイルスによる最大の弊害は、「やりたいことがやれない」ということだ。例えば、エンディングノートで「今まで日本から出たことがなかったから、世界一周旅行に行きたい」と書いたとしても、新型コロナウイルスが世界中に蔓延している現在において、世界一周旅行の実現は非現実的である。このように「やりたいことがやれない」という状況では、計画性を持った行動をとることが困難だ。With



コロナ時代では、Before コロナ時代の計画性をもった死生観が通用しなくなっている。

それでは、人々は新型コロナウイルスの脅威に震え続け、いつ死ぬかわからず死を意識し続けることしかできないのだろうか。新型コロナウイルスのワクチンの実用化が目前となってきた現在、そのように悲観的に考える必要はないと考えたい。それでもなお、新型コロナウイルスという大きな物語による死生観への影響は多大なものとなっており、その後も影響を与える続けるだろう。生命保険もまた、これまでの時代の人々の死生観に寄り添ってきたように、新型コロナウイルス時代においても人々に寄り添っていくと考える。

本論文では生命保険から日本社会を考察し、各時代の生命保険の特徴から死生観や社会的背景について述べてきた。死生観という文献に残りにくい観点から生命保険を社会的に考察することは、難しくもやりがいのある研究だった。最後になるが、指導して下さった澤井先生、助言をくれたゼミ員に感謝を申し上げたい。

#### [注]

- 1)、2) (Swiss Re Institute,2019,「sigma No 3」 「表 3 米ドル建て総保険料ボリューム」) 参照
- 3) (明治生命, 1981 : 9) によると、福澤の社中や門下生らで大半を占めていたようだ
- 4) (生命保険協会, 2018) 参照
- 5) (厚生労働省, 2005) 参照
- 6) (生命保険協会, 2019) 参照
- 7) (厚生労働省, 2019) に記載の 2019 年度平均寿命と (松村, 2020) に記載の算出された健康寿命の差を計算した

#### [文献]

エンディングノート普及研修センター, 2011.

<http://www.ending-center.org/aboutnote/>

福澤諭吉, 1867, 『西洋旅案内. 卷之下』, 慶應義塾出版局.

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/761259>

堀田一吉, 2006, 『民間医療保険の戦略と課題』, 勁草書房.

堀田一吉, 2016, 『現代リスクと保険理論』, 東洋経済新報社.

稲葉浩幸, 2006, 「わが国生命保険業の黎明期と小説」, 生駒経済論叢 第 4 巻第 2 号.

[https://kindai.repo.nii.ac.jp/index.php?action=repository\\_action\\_common\\_download&item\\_id=10955&item\\_no=1&attribute\\_id=40&file\\_no=1&page\\_id=13&block\\_id=21](https://kindai.repo.nii.ac.jp/index.php?action=repository_action_common_download&item_id=10955&item_no=1&attribute_id=40&file_no=1&page_id=13&block_id=21)

川端康成, 1924, 『生命保険』, 文藝春秋.

小谷みどり, 2003, 「死のイメージと死生観」, 第一生命.

<http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/ldi/report/rp0306.pdf>

小谷みどり, 2004, 「死に対する意識と死の恐れ」, 第一生命.

<http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/ldi/report/rp0405.pdf>

厚生労働省, 2005, 「第 20 回生命表について」.

<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/20th/p02.html>

厚生労働省, 2019, 「人口動態統計（確定数）の概況」.

[https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei19/dl/15\\_all.pdf](https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei19/dl/15_all.pdf)

厚生労働省, 2017, 「I. 生活習慣病対策に関する最新の動向 ～特定健診・特定保健指導事業（第3期）の方向性～」.

<https://www.niph.go.jp/soshiki/jinzai/koroshoshiryo/tokutei29/keikaku/program/K1-1.pdf>

明治生命, 1981, 『明治生命百年史』, 明治生命保険.

水島一也, 1995, 『保険文化：リスクと日本人』, 千倉書房.

村松容子, 2020, 「基礎研レター 2019 年健康寿命はさらに延伸 ～制限がある期間はやや短縮するも、加齢や健康上の問題があっても、制限なく日常生活を送ることができる社会を構築することが重要」、ニッセイ研究所.

[https://www.nli-research.co.jp/files/topics/65081\\_ext\\_18\\_0.pdf?site=nli](https://www.nli-research.co.jp/files/topics/65081_ext_18_0.pdf?site=nli)

夏目漱石, 2011, 『吾輩は猫である』, 文春文庫.

日本生命, 2018, CM ギャラリー.

[https://special.nissay-mirai.jp/cm/movie59.html?\\_ga=2.132509065.66066955.1602678088-1211095288.1598622012](https://special.nissay-mirai.jp/cm/movie59.html?_ga=2.132509065.66066955.1602678088-1211095288.1598622012)

生命保険協会, 2018, 「明治時代の生命保険事業について」.

<https://www.seiho.or.jp/meiji/pdf/data.pdf>

生命保険実務講座刊行会, 1958, 『生命保険実講座第6巻 業史・外国事情編』, 有斐閣.

生命保険文化センター, 2019, 「生活保障に関する調査」.

[https://www.jili.or.jp/research/report/pdf/rlhosho/2019honshi\\_all.pdf](https://www.jili.or.jp/research/report/pdf/rlhosho/2019honshi_all.pdf)

総務省, 2010, 「第2章 国民共有の生活インフラー郵便局の基本理念」.

[https://www.soumu.go.jp/main\\_sosiki/joho\\_tsusin/policyreports/japanese/postcouncil/v2010/v2010-2.html](https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/joho_tsusin/policyreports/japanese/postcouncil/v2010/v2010-2.html)

住友生命総合研究所, 1993, 『生命保険入門/住友生命総合研究所編』, 東洋経済新報社

住友生命 HP, 2020, CM ギャラリー.

<https://vitality.sumitomolife.co.jp/ad/>

Swiss Re Institute, 2019, 「sigma No 3」.

[https://www.swissre.com/dam/jcr:dab6f6aa-4fa5-40c7-af55-2cf668693ac8/sigma3\\_2019\\_jp.pdf](https://www.swissre.com/dam/jcr:dab6f6aa-4fa5-40c7-af55-2cf668693ac8/sigma3_2019_jp.pdf)

田畑康人, 岡村国和, 2011, 『人口減少時代の保険業』, 慶應義塾大学出版会.

田村祐一郎, 2008, 『いのちの経済学』, 千倉書房.

植村信保, 2009, 「生命保険会社の経営悪化」.

[http://www.esri.go.jp/jp/others/kanko\\_sbubble/analysis\\_04\\_06.pdf](http://www.esri.go.jp/jp/others/kanko_sbubble/analysis_04_06.pdf)